

要 旨

本研究では、どのような道徳的判断がどのような道徳的行為に結び付くのか客観的に認識させ、自分の中の道徳的判断の基準を捉え直させることで、より確かな道徳的实践ができる児童の育成を目指した。具体的には、複数の登場人物の状況や心情を立場ごとに「心のマトリックス表」に整理し、そこで考えたことや出てきた疑問を友達と交流する活動を取り入れた。これらの活動を通して、道徳的価値を正負の両面から捉え、行為に移した場合の結果や相手の心情も視野に入れた道徳的判断ができるようになり、道徳的判断力の高まりが見られた。

〈キーワード〉 ①道徳的判断力 ②心のマトリックス表 ③他者との意見交流

1 研究の目標

より確かな道徳的实践ができる児童を育成するために、道徳の時間において、主体的に道徳的实践力を高めさせる指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

田沼は、「子供の道徳性は『道徳的価値についての自覚』と『道徳的实践』とが相互補完的に作用し合うことで促進されるものである」と述べている。ここから道徳教育においては道徳的価値の自覚と道徳的实践の双方が大切であることが分かる。しかし、道徳の時間は内面的な道徳的实践力を育てることを目的としており、道徳的实践は児童の自主性に任せるという認識が強い。そのため相互補完的に促進されるはずの児童の道徳性が児童の自助努力によってのみ達成可能となる事態を生じさせてしまっているのではないかと考える。自分自身の道徳の授業を振り返ってみても、道徳的实践は児童に頼る部分が大きく、その結果、児童の実態として「有言不実行」や「正義の押しつけ」といった姿も見受けられた。

しかし、道徳的实践は道徳の時間の指導と無関係ではないと考える。道徳的实践の基盤には内面的な道徳的实践力がなければならない。小学校学習指導要領解説道徳編には、道徳的实践力は、「主として、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度を包括するものである」¹⁾とあり、道徳の時間に道徳的心情や道徳的判断力を養い、道徳的实践意欲と態度を育てていくことが道徳的实践に結び付いていくといえる。ただ、「道徳的实践力は、徐々に、しかも着実に養われることによって、潜在的に、持続的な作用を行為や人格に及ぼすものである」²⁾とあり、ここから道徳的实践力はすぐに身に付くものではないが、着実に養っていくために、道徳の時間において指導の効果を高める工夫をすることが大切であると考えられる。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、道徳的实践力に含まれる道徳的判断力の育成に焦点を絞った授業展開を探っていきたいと考えた。道徳の時間において、資料を通して自分の言動についても考えさせることで、道徳的心情が涵養されると同時に道徳的判断力が高まってくるであろう。また、自分の道徳的实践を阻害する心情や状況などを道徳の時間に整理させておくことで、道徳的实践の基盤が形成され、前向きに道徳的实践ができる児童が育つと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

道徳の時間において、問題場面における価値の大切さや解決方法についての自分の考えを心のマトリックス表に表し、比較したり俯瞰したりした気付きをもって対話活動に取り組めば、自己の価値意

識についての客観的認識が育ち、責任感と主体性を伴った道徳的判断のできる児童に育つであろう。

4 研究の方法

- (1) 道徳的判断力や他者との交流の質的向上をねらった指導についての理論研究
- (2) 道徳意識や道徳的実践に関わるアンケートを基にした児童の実態調査
- (3) 心のマトリックス表を利用した授業実践と検証及び考察

5 研究内容

- (1) 道徳的判断力,自己内対話や他者との交流の質的向上をねらった指導に関しての理論研究を基に,心のマトリックス表に示す効果的な項目を明らかにする。
- (2) 道徳性発達段階を基にした児童の道徳的判断力の実態と変容を分析する。
- (3) 所属校の4年生における授業実践を行うことで仮説を検証し,手立ての有効性を考察する。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

森岡は、コールバーグの理論を引き合いに出しながら、道徳的心情は感情の一種であることを説明した上で、道徳的判断力と道徳的行為の関係について「道徳的判断の中に認知も感情も含まれていると考える。この中の認知的性向が行為に大きな影響を与えるのであり、感情はこの認知的性向に伴うものに過ぎない」³⁾と述べている。つまり、道徳的行為に大きな影響を与えるのは、道徳的判断力の中の認知的な部分であると考えた。

また、2014年10月に出された「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)」の中で、『『特別の教科 道徳』(仮称)の目標については、例えば、様々な道徳的価値について自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省し、多角的に考え、判断する能力、道徳的心情、道徳的行為を行うための意欲や態度を育てることなどを通じて、一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決し、よりよく生きていくための資質・能力を培うこととして示す』⁴⁾と述べられている。この中でも、理解、内省、多角的に考えるなどの認知面の大切さを強調した上で、様々な問題を主体的に解決する資質・能力の育成が道徳の時間の目標として挙げられている。

さらに、コールバーグの道徳性発達理論では、「個人の道徳性は段階的に発達し、人は低次の段階で思考するよりも、可能な限り高い段階で思考することを好む」と結論付けている。なぜなら、高い道徳的思考の方が分化と統合が進んでおり、児童が抱える矛盾や不調和を正しく調整できるからである。しかし同時に、「一段階上の思考を自発的に相当な量用いることでしか、その段階での行為を理解できない」とも述べている。つまり、児童の道徳的判断力を高めるためには、一段階上の思考をある程度習慣的に自発的に行わせる必要があると考えた。

以上のことから、道徳の時間には道徳的価値を多面的に捉えなおし、認知の面を強化すれば、児童は実際の道徳的実践の場面でも、感情や自己の損得に偏ることなく、自己の判断に責任や満足を感じながら、より主体的な道徳的実践に取り組んでいけるのではないかと考えた。

- (2) 研究の全体構想

児童の道徳的判断力を高めていくためには、複数の道徳的判断を捉えさせ、自分がどの考え方に近いのかを考えさせる必要がある。そこで、まず「心のマトリックス表」にそれぞれの道徳的判断についての考えを書き出し、比較できるようにした。そうすることで、ある道徳的判断では不満足や不調和が生じ、またある道徳的判断では解決と調和に結び付いていることを捉え、より後者の方に児童の思考が傾いていくのではないかと考えた。次に、ある道徳的判断で出てきた不満足や不調

和をどのように考えると解決や調和につながれるのかを、児童一人一人に考えさせた上で、意見交流を行わせる。そうすることで、自己の判断を強化したり、修正したりできるのではないかと考えた。このような流れで、道德の時間を仕組みれば、児童は自己の道德的判断の基準を再構築し、道德的実践力を高めていけるのではないかと考えた(図1)。

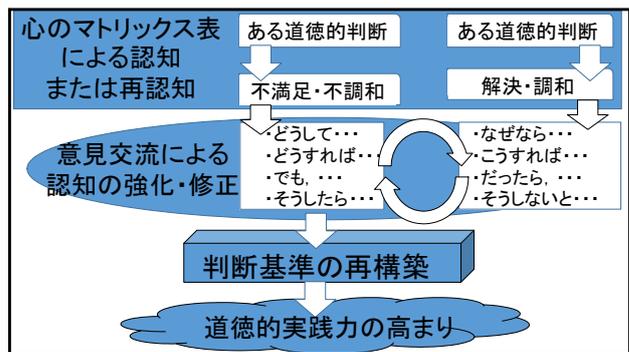


図1 研究の全体構想図

(3) 心のマトリックス表について

ア 心のマトリックス表の使用の意図と書き込む内容

心のマトリックス表を使用する意図は、道德的判断が行為を決定付け、必然的に自分や周囲の人が受ける結果が違ってくことを児童自身に認識させることにある。自分の道德的判断がどのような結果につながるのかを実感できれば、児童はその道德的判断をよりよい方に修正しようとするのではないかと考える。そこで、心のマトリックス表では、道德的判断の立場で縦に区切り、未熟(低次)な判断をしている登場人物を左側に置き、よりよい(高次の)判断をしている登場人物を右側に配列した(図2)。(以下、未熟な判断をしている立場を低次、よりよい判断をしている立場を高次として記述する)そして、考えさせたい項目を横に配列した。この項目は、つながりを意識させるため、行動のきっかけとなった思いや気持ち、その理由や判断基準、行動の結果とした。児童には、まず低次の判断基準をもった登場人物の心情や判断理由、そして予測される結果(不満足・不調和な状態)などを行動から順を追って推測させる。次に高次の判断基準をもつ人物も同様に行う。そして、その内容を比較したり俯瞰したりすることで、児童が判断の違いを明確に意識し、どのような判断がどのような結果に結び付いているのかを客観的に捉えることができると考えた。

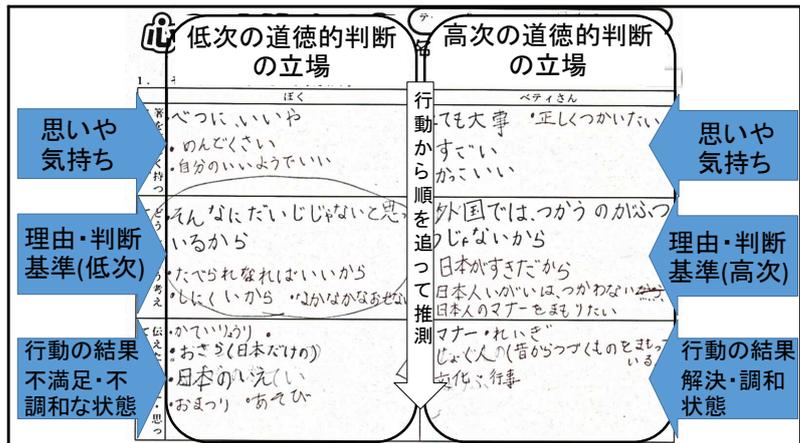


図2 心のマトリックス表の内容

図2)。(以下、未熟な判断をしている立場を低次、よりよい判断をしている立場を高次として記述する)そして、考えさせたい項目を横に配列した。この項目は、つながりを意識させるため、行動のきっかけとなった思いや気持ち、その理由や判断基準、行動の結果とした。児童には、まず低次の判断基準をもった登場人物の心情や判断理由、そして予測される結果(不満足・不調和な状態)などを行動から順を追って推測させる。次に高次の判断基準をもつ人物も同様に行う。そして、その内容を比較したり俯瞰したりすることで、児童が判断の違いを明確に意識し、どのような判断がどのような結果に結び付いているのかを客観的に捉えることができると考えた。

イ 意見交流における心のマトリックス表の使い方

意見交流前に、理由や判断に着目させ、その時点での自分の考えはどちらに近いかを選択させる。そうすることで、資料中の人物の立場を今の自分の立場として認識できると考える。その後、低次の段階では解決できない課題に対する自分の考えを導き出し、友達と交流することで、その考えを強化したり、修正したりできるのではないかと考えた(図3)。最後にこれからの自分について記述をさせることで、児童の道德的判断力に高まりが見られるのではないかと考えた。

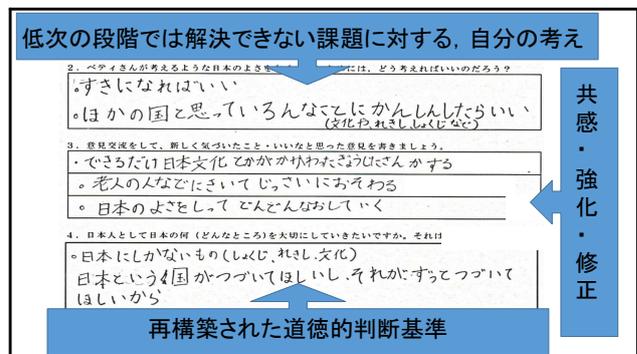


図3 意見交流の際の記述

(4) 授業の実践と考察

「心のマトリックス表」を使った授業の有効性を確かめるために、以下のような検証の視点をもって検証授業を行った。

【検証の視点Ⅰ】 心のマトリックス表に記述することは、児童が自己の価値意識を客観的に見つめ直すことにつながっていたか

【検証の視点Ⅱ】 心のマトリックス表に記述したことを基に意見交流することは、児童の道徳的判断力の向上に有効であったか

検証授業は5時間行った。授業における資料名と内容項目は、以下に示す通りである(表1)。

表1 検証授業の概要

検証授業	第1時(11月)	第2時(11月)	第3時(11月)	第4時(1月)	第5時(2月)
資料名	「一輪車」	「心と心のあく手」	「ばんざい、大きな花丸」	「ジュースの空き缶」	「おはし、ちゃんと使えないの」
内容項目	2-(3)友情	2-(2)思いやり	1-(5)個性伸長	4-(1)公德心	4-(6)愛国心
主題名	互いに信頼できる友情	互に通じる思いやり	伸ばしていきたい自分のよさ	見えないきまり	身に付ける日本のよさ
出典	茨城県教育委員会 読み物資料	文部科学省 「わたしたちの道徳3・4年」	学研 「みんなの道徳4年生」	日本文教出版 「あずを見つめて3年生」	光文書院 「ゆたかな心4年生」

ア 心のマトリックス表に記述することは、児童が自己の価値意識を客観的に見つめ直すことにつながっていたか(検証の視点Ⅰ)

(ア) 心のマトリックス表に対する全体の児童の意識の変化

授業ごとの事後アンケートで「表に書き表して考えたことは、自分にとってどうだったか」について、「満足」「少し満足」「少し不満」「不満」の4段階で自己評価させた。その結果、第1時から第3時までは「少し不満」と答えた児童が少しいたが第4時にはすべての児童が「満足」「少し満足」と答えていた(表2)。その理由として、「自分の心が整理できた」、「自分の本当のことが考えられた」また、「勇気が出たから」、「慰め方が分かったから」などの記述が多くあった。このことから、児童が自分を見つめ直したり、道徳的価値の側面に気付いたりすることに、心のマトリックス表が役立っていたと考えられる。

表2 心のマトリックス表の有用感の推移

「心のマトリックス表に書き表して考えたことは、自分にとってどうだったか」				
n=12 単位(人)	満足	少し満足	少し不満	不満
第1時	8	3	1	0
第2時	5	5	2	0
第3時	7	3	2	0
第4時	10	2	0	0

(イ) 抽出児に見る心のマトリックス表についての具体的な記述の考察

次に、具体的な記述の変容を抽出児ごとに分析した(表3)。授業実践の前に道徳的価値に対する意識調査を行い、その結果と実際の道徳的実践を比較して児童の抽出を行った。A児は価値の大切さの認識と道徳的実践のどちらもできていると考えられる児童である。B児は価値の大切さの認識と、道徳的実践のどちらにも曖昧さがある児童である。C児は事前の意識調査で道徳的価値の大切さの認識が曖昧で、道徳的実践があまりできていないと考えられる児童である。表3を見るとA児は第1時から、「心のマトリックス表」を使用する意義を自分なりに捉え、第4時まで一貫して自己を見つめ直すために「心のマトリックス表」を利用していたことがうかがえる。B児は第1時には「解決の仕方をよく考えるのに役立った」と資

表3 「心のマトリックス表」についての抽出児の具体的な記述

	第1時	第2時	第3時	第4時
ねらいとする価値	友情	思いやり	個性伸長	公德心
A児	色んなことを違う見方で考えられた	自分がやりたいことを見つけたことができた	考えてなかったことを考えられた	自分の正直な気持ちを表せた
B児	解決の仕方をよく考えるのに役立った	整理する力と考える力がついた	相手のことを二つのことを条件に考えられた	整理しやすい
C児	仲直りなどがしやすくなった	分かりやすかった	友達の良いところが分かった	分かりやすかったし、覚えやすい

料が豊富で、授業実践の前後に道徳的価値に対する意識調査を行い、その結果と実際の道徳的実践を比較して児童の抽出を行った。A児は価値の大切さの認識と道徳的実践のどちらもできていると考えられる児童である。B児は価値の大切さの認識と、道徳的実践のどちらにも曖昧さがある児童である。C児は事前の意識調査で道徳的価値の大切さの認識が曖昧で、道徳的実践があまりできていないと考えられる児童である。表3を見るとA児は第1時から、「心のマトリックス表」を使用する意義を自分なりに捉え、第4時まで一貫して自己を見つめ直すために「心のマトリックス表」を利用していたことがうかがえる。B児は第1時には「解決の仕方をよく考えるのに役立った」と資

料の中の友達関係の改善を考えるのに役立ったと捉えているが、第2時以降は自分を見つめ直すことに利用していたことがうかがえる。C児は第1時と第3時は授業で学んだ価値についての記述であるが、第2時と第4時は「分かりやすかったし、覚えやすかった」と記述しており、実際の授業でも自分と友達の考えの違いをしっかりと捉え、それを確かめながら活動する様子が見られた。これらの記述を比較すると、価値の大切さの認識と道徳的実践のどちらもできていると考えられる児童は、心のマトリックス表を使って客観的に自分の考えを深く見つめ直すことができ、価値の大切さの認識が曖昧で道徳的実践があまりできていない児童は、心のマトリックス表を使って学んだ価値に目を向けやすいという様相が見られた。

(ウ) C児の心のマトリックス表への具体的な記述の分析

最後に、実際の授業中での心のマトリックス表の記述に具体的にどのような変容があったのか、C児の記述内容を基に分析した。

初めに、C児の第1時と第4時での記述の様子を比較した。第1時でC児は、心のマトリックス表に一人では記述できず、教師の支援を必要としていた。特に、主人公とは別の立場の「このままの未来」の部分は全て、友達の発表を参考にしながら記述していた(図4下線部)。相手も困っていることや、本当はどうにかしたいと思っていることに自分だけでは気付

	わたし	正子
困ったこと	・今まで一緒にしてきたのに ・あんなことを言われたから ・これからどうすればいいのかわからない	・一輪車に乗りたい
このままの未来	・正子さんとの友情がなくなる	・もう一輪車に乗れない ・友達じゃいられない ・ずっと一緒に遊べない
理想の未来	・もう一度練習したい	・乗りたい ・友達でいたい

図4 第1時のC児の記述

けず、一つの立場でしか物事を考えることができないうでいたと考えられる。それが第4時には、考える立場が3人に増えたにも関わらず、教師の支援も必要なくなり、全ての欄を自分の言葉で書くことができるようになった(図5)。

次に第4時のC児の心のマトリックス表への具体的な記述の内容を分析する。C児は、納得した友達の意見をたくさん書き込むことができていた(図5下線部)。また、自分に一番近い考えとして、低次の考えを選択しており、「缶を拾ったら汚れる」という部分にこだわっている。そして、その判断で起きる結果は「満足してない」と記述している(図5丸囲み)。さらに、「早く誰か片付けないかな」と記述していることから、「自分が汚れるのは嫌だけど、このまま電車が汚れていくのも嫌だな」と不調和状態にあることがうかがえる。この後C児は、「3人の中で誰か1人に質問するとしたら、どんな質問をしてみたいか」という問いに、「拾って汚いと思いませんか」という質問を考え、高次の考えの友達と交流に臨んでいた。道徳的行為を阻害する自分の中のわだかまりに気づき、それをどう解消していけばいいのか思考を深めていることが分かる。

	低次の考え	揺れ動く立場	高次の考え
空きた時の気が持たず	きつていい きつていい きつていい きつていい	きつていい きつていい きつていい きつていい	きつていい きつていい きつていい きつていい
理由・行動を考えた	自分が汚れるのは嫌だけど、このまま電車が汚れていくのも嫌だな	自分が汚れるのは嫌だけど、このまま電車が汚れていくのも嫌だな	自分が汚れるのは嫌だけど、このまま電車が汚れていくのも嫌だな
行動した後の気持ち	満足してない	満足してない	満足してない

図5 第4時のC児の記述

以上のことから、「心のマトリックス表」に自分の考えを書き込むことで、児童は無意識だった自分の考えを意識するようになり、自分の価値意識を客観的に見つめ直すことができるようになってきたと考える。また、「心のマトリックス表」を用いて、複数の立場で気持ちや理由を整理することは、自分がこれまで気付かなかった価値の側面に気付くことや自分の考えとは違う立場に立つて考えることに役立ったと考えられる。

イ 心のマトリックス表に記述したことを基に意見交流することは、児童の道徳的判断力の向上に有効

であったか(検証の視点Ⅱ)

(7) 道徳的判断力の向上の見取り方

柳沼は問題解決型の道徳授業の中で「道徳性発達段階に基づく評価基準」を表4のように設定している。レベルは5bまでであるが、中学年で到達するのは難しいためここでは割愛する。この表を見ると、自分から相手、集団(周りの人)への視野の広がりや他律的な意識から自律的な意識への高まりを道徳的判断力の高まりと捉えることができると考えた。この観点を基に児童の道徳的判断の理由を分析し、児童の道徳的判断力の向上について検証した。そこで、第4時で抽出児が記述したワークシートの、心のマトリックス表の部分と、意見交流での記述の部分と比較し考察する。

表4 道徳性発達段階に基づく評価基準

レベル	観点
Lv0	本能的に苦痛を避け、快楽を求める
Lv1	他律的に罰を避け、報酬を求める
Lv2	自律的に目先の苦痛を避け、目先の利益を求める
Lv3a	身近な人の欲求や権利を優先する
Lv3b	仲間集団の秩序と安定を尊重する
Lv4a	身近な弱者や他者の欲求や人権を尊重する
Lv4b	学校や地域社会の秩序と安定を尊重する

(1) B児の道徳的判断力の向上の考察

第4時では、公德心の内容項目で授業を行った。電車の中で、捨てられた空き缶に対して3人の人物がそれぞれ異なった行動をしている資料を用いた。40才くらいの男の人は空き缶をよけ、あつしは空き缶を蹴り、20才くらいの女の人は空き缶を拾って捨てるという内容である。この授業におけるB児の記述内容を基に考察した。

B児は最初、あつしに共感していた(図6丸囲み)。この立場は、できれば関わりたいくないという低次の判断と、缶を拾って捨てるという高次の判断の間で心が揺れ動いている立場である。その後、それぞれの判断理由で起きる結果の満足感を全体で話し合うと、B児は「20才の女性だけが満足している」と考え、「あつしも今度同じような場面にあったら缶を拾うのではないか」と考えていた(図6四角囲み)。このように、友達の発表を聞くことにより、高次の判断の考えに触れ、自分の考えを見直していったものと思われる。

それぞれの立場にたつて考えよう。	40才くらいの男の人	あつし	20才くらいの女の人
空き缶が転がって来た時の気持ち	・おれじやないからしらない ・きたない缶なあ ・たれたらう ・ひままでなあ	・いやだなあ ・くるな ・もってかえってほしいなあ ・あつしは	・だれかすてたんだろ ・おれはほかにすてたやつ ・きたないなあ ・いいわくじなあ
理由を考えた	・きたないし、さわりたいくないから ・だれかがひろうだろう ・あつし、たごごがついてないから ・おれ自分のしらない	・あ、ちについてしまったから ・ひろいたくない ・おれの人もひろってない ・おれしらない	・ほかの人にもめいわくをかけるしごまは、ごんな戸外にすててはいけいから ・みんながひろうから ・缶がすてはける
行なった感想	・このままうがても、たれかひろうからいいわしらない ・まんてくしてない	・まんてくしてない ・もってかえってほしいなあ ・おれ、たれかひろうからいいわしらない ・かえらばいいから ・まんてくしてない	・まんてくして ・人のすくにしたててか ・みんなにめいわくかけず、にすんだから ・すてりして

図6 第4時のB児の記述(前半)

疑問は解決できないまま	3. 3人の中で、誰か一人だけに質問するとしたら、どんな質問をしてみたいですか。	質問 男の人 なんで自分に関係ないと思ったのか	違う立場の人への疑問
	4. 意見交流をして、感じたことを書きましよう。	いろんなんにさいたけど、みんなわからなかつたからさみんなの ままたた(してか)か;	
	5. また同じような場面にあつたら、あつしはどう考えますか、矢印で方向を書きましよう。 6. 見えないルールは、自分にとって守る価値がありますか、それはどうですか。	(あつし)ない ちよつとでも、人の役に立つし、人の迷惑が減らせるから	
再構築された道徳的判断基準			

図7 第4時のB児の記述(後半)

そこで、「登場人物の3人の中で誰か一人だけに質問するとしたら、どんな質問をしてみたいか」との問いに、40才くらいの男の人に対し「なんで自分に関係ないと思ったのか(なぜ缶をよけたのか)」と記述していた(図7)。これは、B児は、高次の考えの方に傾いてきた上での質問と考えられる。この質問に対し、B児は意見交流では、缶をよけた行為を正当化する考えは得られなかった。ここで、B児は「人が捨てたものでも自分に関係がある」という考えを強め、最終的には「ちよつとでも人の役に立つし、人の迷惑が減らせるから」という判断を記述していた(図7)。このことからB児は、自分の損得感情から生じた迷いがなくなり、みんなのためにと、より高次の道徳的判断ができるようになっていったと捉えられる。

(2) A児の道徳的判断力の向上の考察

次に、A児の記述を基に考察した。A児は20才くらいの女性に共感していた(次頁図8丸囲み)。つまり、最初から自分の損得にとらわれず、みんなのためにと、という考えをもっている。そして、40才くらいの男の人に対して「どうして、面倒くさがつて拾わなかったのですか」と質問を考え、意

は、事前には多くの児童が他の国のよさを考えておらず、日本のよさだけを捉えていたことが分かる。しかしながら、事後には、直観的な理由が一人もいなくなり、「日本人は親切だから」、「自然が多いから」など日本のよさだけに目を向けている児童が4人、「日本もいいけど、外国にもいいところがある」や「外国にはないものが日本にあるし、日本にないものが外国にある」など外国のよさにも目を向けている児童が8人であった。授業では外国のよさについては何も取り扱っていないにも関わらず、児童が、外国にもよさがあることに気付いたり、外国の人の立場で考えたりすることができたのは、心のマトリックス表の中で外国の人の立場で思考したことが、複数の視点をもつことにつながったと推測される。

以上のことから、心のマトリックス表で自分の考えや立場を明確にし、それを基に意見交流をしたことは、児童が自己の考えを強化したり修正したりすることに有効であったと考える。そして、その強化や修正の方向は、より複数の立場に立って考えたり、より自律的な意識をもったりしたことを踏まえており、心のマトリックス表で分けた項目の高次の判断に関係することであった。また、より高い道徳的判断基準の考え方を経験したことによって、児童は、価値を見つめるときに自分以外の視点や別の角度からの捉え方もするようになり、自己の行動に対する理由付けも明確になっていた。つまり、児童の道徳的判断力に向上が見られたと考える。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

道徳の時間に心のマトリックス表に記述をさせてから意見交流を仕組んだことは、児童が道徳的実践力につながる道徳的判断力を主体的に高めるのに有効であった。また、次のことが分かった。

- ・ 心のマトリックス表に立場を分けて記述することで、理由から結果までを結び付けて考えるようになり、ねらいとする価値について、児童は自分のもつ価値意識への客観的認識を高めることができる。
- ・ 心のマトリックス表への記述を基に、意見交流をさせることで、児童は自分以外の考え方に触れ、自分の道徳的判断を強化したり修正したりすることができ、道徳的判断力の向上につながる。

(2) 今後の課題

- ・ 善対善の価値葛藤や個性伸長など、優劣の判断はできないが、考える視点は増えた方がよい価値も多くあると考える。そのような場合に有効な心のマトリックス表の項目について考えていく必要がある。
- ・ 児童は他者の立場は理解できても、他者の立場に立って意見交流をすることは困難であった。より高次の段階で自発的に思考させる工夫を考えていく必要がある。

《引用文献》

- 1)2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年 東洋館出版 p. 30
- 3) 森岡 卓也 『道徳授業の問題点Ⅰ－道徳的心情を育てることの意義－』1991.2
- 4) 中央教育審議会 『道徳に係る教育課程の改善について』平成26年10月21日 p. 3

《参考文献》

- ・ R・コールバーグ 『道徳性の発達と道徳教育－コールバーグ理論の展開と実践－』1987.8
- ・ 柳沼 良太 『問題解決型の道徳授業～プログラマティック・アプローチ～』2006.3

《参考URL》

- ・ 田沼 茂紀 『道徳教育充実に向けての問題把握とその解決のための課題』
<http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/seisaku/2013konwakai/251115.html>